



## 包括協定自治体との意見交換会を開催しました

2020（令和2）年11月26日に、包括協定自治体との意見交換会を、新型コロナウイルス感染予防の観点から、オンラインにて開催いたしました。この交換会は、包括協定を結んでいる自治体と本学との連携状況を共有し、より良い連携を実現することを目的に毎年開かれています。なお、現在、本学が包括協定を結んでいる自治体は10自治体あり、今年度は全ての自治体が参加しました。本学からは、地域連携担当の原田俊英副学長、太田克司事務局長をはじめ、地域基盤研究機構長市村匠教授、各キャンパスの地域連携センター長、センター所属教職員等が参加しました。

意見交換会では最初に今年度実施の地域戦略協働プロジェクトの進捗状況が報告されました。新型コロナウイルスのため十分な学生参加ができない、スケジュールが遅れる等の問題もあるものの、概ね順調に進んでいることを確認しました。自治体から見ると他市町の本プロジェクトを知る機会は少なく、他市町の情報を得たことが有益であったという意見も後日ありました。なお、今年度の地域戦略協働プロジェクト事業は以下のとおりです。

庄原市	比婆いざなみ街道ブナ林の生態系にあるクロモジを活用した香りビジネス展開について
三原市	三原市内事業所の職場環境の現状と、男女がともに働きやすい環境整備に向けた今後の方向性
安芸高田市	県立広島大学との連携協定を活かした地域の課題解決の仕組みの検討
世羅町	MFCによる営農団地内の沈砂池・調整池の水質・底質改善効果の検証
江田島市	江田島市航路の魅力アップ事業
三次市	女性活躍支援のための施策研究（具体的な取組の検討）
広島市南区	似島の新たな魅力発見と情報の発信
大崎上島町	柑橘農家の農作業負担軽減調査並びに収穫支援サポート

\*今年度は、廿日市市・尾道市との地域戦略協働プロジェクトは実施しておりません。

続いて、2015（平成27）年度から2019（令和元）年度に実施された当該プロジェクト43件について、満足度や有益性等の調査を本年度実施していますが、その中間報告を行いました。概ね満足しているとの結果が出たものの、プロジェクト成果の実際の施策への反映という点ではさらなる向上が必要との結果となりました。学生参加については全ての自治体で今後も希望があり、この点は今後強化する旨、報告がなされました。

これらの協議のあと、地域基盤研究機構からの情報提供として、4月からスタートした本学の新学部の紹介、新型コロナウイルス感染対策を重視した形での2021（令和3）年度の公開講座の実施方針、宮島学センター、プロジェクト研究センターの活動報告を行い、本学との新たな連携のための参考資料としました。最後に本学の重点研究のひとつである地域課題解決研究の募集が行われていること、また2021（令和3）年度の地域戦略協働プロジェクトも1月8日を期限に新たな課題を募る予定であることが報告されました。

この意見交換会終了後、すでに公開されている昨年度の地域課題解決研究の報告会の動画に加えて、過去実施した地域戦略協働プロジェクトの中から8件の案件を紹介する動画を公開しました。その動画からは、具体的な本学と市町との連携の状況がわかると同時に学生の本プロジェクトへの参加状況を知ることができます。これらの広報活動も通じて自治体との連携をより充実させていきたいと考えています。

## 広島キャンパス

## HIROSHIMA CAMPUS

### キャンパスメンバーズ

#### 広島交響楽団特別講義

本学は、学生・教職員が優れた音楽・芸術・文化に触れられるよう、広島交響楽団や広島県内の美術館・博物館のキャンパスメンバーズ制度に加入しています。広島交響楽団には、キャンパスメンバーズの特典の一つとして、2013（平成25）年度以来毎年、広島キャンパスで団員による特別講義を提供していただいておりますが、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、特別講義を事前に録画し、一定の期間、自由に視聴（学内限定）する方法で開催しました。

広島交響楽団員のトランペット奏者である金井晶子様を講師に招き、11月30日に広島キャンパスの大講義室で特別講義の録画を行いました。

特別講義は「トランペツ 特別講義の案内（WEB用）

トからみる、人と人との繋がり」というタイトルで、音楽の道へ進んだきっかけやオーケストラに入



様々なトランペット

団して良かったことや大変だったこと、トランペツの歴史やどのような曲でどの楽器が使われたのかという変遷などをトランペツの演奏を交えてお話ししてくださいました。



講演中の金井様



ブ論入門、ファイナンス論入門、会計学入門をテーマに講義を行い、延べ45名の高校生が参加しました。

アンケート結果には「実際に大学の先生方に授業形式でお話をしても



村上恵子教授による講義の様子

ら、自分で調べただけではわからなかった経営の学びを様々な視点で知ることができた」などの感想があり、満足度が高い授業でした。

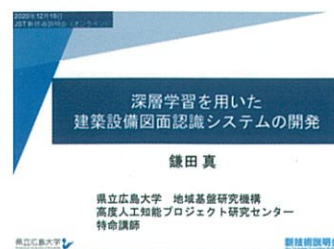
### 2 「経営情報学連続講座－情報学で何ができるのか－」

2020（令和2）年3月に予定していた経営情報学連携講座が新型コロナウイルスの影響により延期となり、10月10日、17日にZoomを使用したリアルタイム配信で実施しました。講座では、高校数学で分かるフィードバック制御、コンテンツ志向型データ配信ネットワーク、デジタル画像処理の基礎と生体認証への応用、コンピュータ将棋・コンピュータ囲碁の進歩について講義しました。延べ35名の高校生が参加しました。アンケートには、「先端技術の仕組みや現状を知ることができ、発見があつてとてもおもしろかった。もう少し長く聞いてみたかった」などの感想が寄せられ、満足度が高い授業でした。

### 地域連携・産学連携

#### 新技術説明会

新技術説明会は、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）が産学のマッチングの場を提供し、大学などの研究成果を企業に技術移転することを目指して、新技術や産学連携に興味のある企業関係者に向けて、研究者自らが直接発表を行う説明会です。今年度の、情報に関する新技術説明会に、地域基盤研究機構高度人工知能プロジェクト研究センターの鎌田真特命講師の研究テーマが採択され、12月15日にオンラインで開催された説明会において発表を行いました。産学官から98名の参加者があり、今後、新たな連携や技術移転などに結び付けたいと考えています。



### 公開講座

#### 高校生対象公開講座

次の高校生対象公開講座をオンラインで実施しました。

##### 1 「高校生のための経営学入門講座」

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、録画した公開講座をオンデマンドで配信しました。

第1回：10月10日～10月18日

第2回：10月19日～10月25日

講師4名がマーケティング論入門、リーダーシッ

## 研究紹介

## 未来を紡ぐ学問としての書誌学

地域創生学部地域創生学科  
地域文化コース 准教授 目黒 将史

書誌学の授業を担当しています。「書誌学」と聞くと何となく小難しいイメージを抱かれるかもしれませんが。私は文学研究の始まりは一冊の「本」との出会いであると考えます。その「本」にどのような内容が書かれているのかだけでなく、どのようにして編まれたのか、どこに所蔵されているのか、どのように伝来してきたのか、「本」そのものの歴史を考え、位置づけをしていく、書誌学とは文学研究において常に問われる学問としてあるものです。



資料そのものだけを見つめているわけではありません。資料が作り出される背景には人が息づき、活動する現場があります。様々な人々がつながりをもって「知」と「学」を築き上げていき、「本」や「文庫」を形成していく文化史全体、書物をめぐるネットワーク、人と書物とをめぐる文化の総体を探ることが書誌学には問われているのです。

現在、資料の保存が難しくなり、資料が移動、売却などにより散逸している事例も多いです。時代情勢は資料にとって決して芳しくないのかもしれませんが。しかし、今残されている資料も先人から受け継いだものであり、その先の「知」の連環、継承が不可欠です。書誌学は未来を見据えてこそ成り立つものです。過去を知り、未来を紡ぐために、現代の知識を総動員することが求められるわけです。そのために、国会図書館や各大学図書館などで進められていますが、デジタルアーカイブの活用も今後は必要になってくるでしょう。

本とも人とも出会いは縁です。これからどのような本や人と出会えるのか、それを楽しみに研究を行っています。文庫の悉皆調査、目録の作成、資料のデジタル化などの作業を通して、地域に残された和本などの資料群を、地域の文化遺産として残すためにはどうしたらよいかを、地域の皆さんと一緒に考える活動をしていきたいと考えています。

## 熱中症を防ぐ新たな手法の構築を目指して

大学教育実践センター  
(兼)地域創生学部地域創生学科 健康科学コース 准教授 辻 文

近年、気温上昇によって熱中症による搬送者数は増加傾向にあります。熱中症の要因としては、一般的に体温の上昇、脱水や循環調節の不全などが知られていますが、これらに加えて、近年、体温上昇時に起こる過換気（過呼吸）が関与している可能性が明らかになってきました。実際に、熱中症で搬送された患者のうち3割もの方が過換気の症状を示していたことが報告されています。これまでの研究から、体温がおおよそ1.5℃上昇すると無意識のうちに過換気（呼吸が速くなる）となり、この過換気によって脳血流量の低下を介した脳虚血や脳温上昇が起これ、これらが熱中症の一因であることが示唆されています。しかし、体温上昇時に過換気や脳血流低下が起こるメカニズムや、これらの反応を防ぐ具体的な手法については不明な点が多く、私は、これらを明らかにするために研究を進めています。実験では、ヒトを対象として、温度と湿度を制御できる環境制御室を用いて、暑熱環境下で運動を行ってもらい、その際の体温や発汗、呼吸、脳血流反応など様々な生体応答を測定・検討しています。自身の研究を通して、熱中症の発生および運動パフォーマンスの低下を防ぐ新たな手法の構築を目指しています。



また、温度感覚や快適感覚に関する研究も行っています。暑い、寒いといった感覚は、衣服の着脱やエアコンの温度調節といった行動性の体温調節反応を決定する上で非常に重要な感覚です。このような温度感覚に及ぼす高所環境（登山時など）や暑熱環境の影響などを調べています。これらを明らかにすることで、スポーツウェアの開発や住環境の整備において有益な知見・情報を提供したいと考えています。

## 庄原キャンパス

SHOBARA CAMPUS

## 公開講座

## 多文化共生入門講座

現在、多文化共生のニーズが社会的に高いことから多文化共生をテーマとして、本学主催講座を8月21日、9月9日にサテライトキャンパスひろしまにて実施しました。新型コロナウイルス感染症が広がるなか、今年度最初の対面式での公開講座となり、受講者のマスク着用、検温、ソーシャルディスタンスを確保した座席の配置、講師のフェイスシールドの装着、アルコール消毒の徹底など、感染予防対策をとっての開催となりました。講師などは別表のとおりです。2日間で延べ20名の参加があり、「大変満足」、「満足」の回答を全員から得ることができました。

回	演 題	講 師
1	多文化共生社会時代における日本社会の課題	庄原地域連携センター 教授 上水流久彦
2	外国人労働者問題を考える	広島文教大学 講師 岩下 康子
3	外国人児童生徒等に対する言語支援の現状と課題	国際交流センター 准教授 中石ゆう子
4	外国にルーツをもつ子どもの教育課題	地域創生学部 教授 植村 広美

## 庄原市民公開講座「イネを見る」

11月27日、12月2日、12月3日に本学庄原キャンパスにて、庄原市民公開講座「イネを見る」を開催しました。前期の庄原市民公開講座は学外で実施しましたが、本講座は新型コロナウイルス感染予防対策（マスクの着用、検温、ソーシャルディスタンスの確保）をとったうえで、学内で実施しました。加えて受講生の上限を10名までとし、応募者の中から参加できる人数を制限しました。延べ21名の参加があり、全員に受講修了書を例年とは異なり、郵送しました。なお、講師等の詳細な情報は下表のとおりです。

第1回、第2回は講義を中心に、第3回は実験を中心に実施し、講義と実習を組み合わせた新たなスタイルとなりました。第1回は詳細なイネの病気に関する膨大且つ詳細な資料が提示されました。第2回では市民から地元のイネの情報が講師に提供され、第3回では実験の補助として学生も参加し、市民との交流もありました。来年度は、人文学（前期）と食（後期）をテーマに実施する予定です。

回	演 題	講 師
1	イネの病気を見てみよう	生物資源科学部 教授 奥 尚
2	イネの品種改良の歴史をたどる	生物資源科学部 教授 福永 健二
3	酸化に強い? コメ油の良さを見てみましょう	生物資源科学部 准教授 山本 幸弘



第3回実験講座

## 2020 庄原 MaaS プロジェクト

MaaS（マース）とは、Mobility as a Serviceの略で、「個人の移動ニーズに合わせて、公共交通やそれ以外のサービスを最適に組み合わせて検索・予約・決済などを一括で行うサービス」です。

庄原MaaSプロジェクト（実用化に向けた実証実験）は2019（令和元）年度から始まりました。初年度は観光型MaaSでした。本年度は、生活交通などに使える「地域生活交通MaaSプロジェクト」として、11月24日から12月23日に、庄原市東区域、山内区域、本学庄原キャンパス区域と庄原市内中心部区域を結ぶ予約型バスが運行されました。市民の皆様に加え本学庄原キャンパスの学生や教職員がモニターとして参加しました。

スクールバスが運行されているにも関わらず、学生や教職員で延べ168人が利用しました。予約する必要があるが、途中のバス停での予約がない場合は、ノンストップで目的地に行けるため、時刻表より比較的早く着く傾向にありました。早着だけでなく、既存のバス停以外にも乗降スポットが設定しており、利便性が考えられた自由度の多い予約型バスでした。

今後、過疎地域での公共交通サービスのひとつとなっていくことを期待します。

## 研究紹介

### メタボローム解析による地域食品資源の有用性評価

生物資源科学部地域資源開発学科 准教授 馬 洸 良 太

メタボローム解析とは、試料中の代謝成分を網羅的に解析する研究手法です。様々な成分種を対象に解析するため対象試料の今現在の状態を包括的に評価できます。食品の機能には、一次（栄養素）、二次（おいしさ）、三次（生体調節）があります。さらに安全であることも大事です。このような食品機能・安全性をメタボローム解析により総合的に評価しています。研究室では、GC-MSを用いた水溶性一次代謝成分を対象としたメタボローム解析の評価系を確立しています。受託・共同研究での解析を積極的に受入れています。興味があれば問い合わせください。また、より様々な成分評価に対応するため、現在新しい実験系の確立にも取り組んでいます。



広島県には豊富な農畜水産物があります。また、それらを利用した加工品も多く開発されています。このような食品資源の良さをメタボローム解析で化学的に明らかにし、科学的根拠に基づいて地域食品資源の有用性を発信できたらと思っています。これまでに、広島県産レモン、呉市広カンラン、江田島産クロダイ等で実施してきました。今後は、県北の資源にも目を向け地域連携できたらと思っています。県内にはまだまだ有効活用されていない食品資源があります。それらを化学的に評価していき少しでも地域へ還元できたらと思います。

### 生物リズムの調整を介した作物の生育制御

生物資源科学部地域資源開発学科 講師 谷 垣 悠 介

多くの生物は「リズム」をもって生命活動を行っています。その代表的なものが「体内時計」です。体内時計と聞くと動物だけが持っているものと思われるかもしれませんが、植物にもあります。植物はもちろん自ら移動できないので移動による「時差ボケ」は起こりませんが、生育環境の変化により時差ボケになります。この時差ボケより、生育が不安定になり、農業では収穫量を大きく減少させます。また、日本では均一なサイズが好まれることから、規格外で破棄されるものも多くあります。つまり、日本の農業で儲けるには作物を効率的に均一に育て、安定した生産量を確保することが重要なのです。また、私のいる庄原市も日本各地にみられる地方同様、農業が大きな産業であり、持続可能な農業の確立は地方存続・活性化に不可欠です。



そこで私の研究室では、生物リズムを大きなテーマに置き、それを調節し作物の生育をコントロールさせる技術を研究しています。この技術は生物に共通する生物リズムを調整するので、栽培場所、環境、品種が変わっても使用でき安定的な作物生産が可能になります。また、この技術は、研究レベルではなく、実際の農業で使えるものでなくてはならないと考えており、構築コストの削減にも取り組んでいます。

## 地域連携 平成 31 年度 地域戦略協働プロジェクト 三次市

昨年度、協働プロジェクトとして「三次市女性活躍推進プラットフォーム事業による子育て世代女性の経済的自立支援」を実施し、本学の学生の協力を得て大学生の労働観や就職観についてのアンケート調査と、三次市の女性の雇用の優良事例となる事業所とその事業所の従業員に対する聞き取り調査を実施しました。前者の調査からは、女性の働く環境について、本人のやる気よりも職場や家庭の理解・支援が重要だと考えていることがわかりました。後者からは、調査対象の事業所の共通点として、積極的に従業員の声を聞くように努力していることが明らかになりました。結果、男性の育児や介護へのサポートにも繋がっていました。ワークライフバランスに配慮した雇用環境は、中小企業、とりわけ地方の中小企業では難しいとされていますが、今回の調査で三次市内でも優良事例があり、その意義は大きいものでした。

## 三原キャンパス

MIHARA CAMPUS

## 市民講座

## 三原シティカレッジ



オンライン三原シティカレッジ20  
すこやか子育て講座を開催しました。

毎年好評いただいている三原シティカレッジを今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から対面ではなくインターネットを使ったオンラインで開講しました。例年より遅れてのスタートになりましたが、今年度一番初めに開講した「すこやか子育て講座」では、本学看護学科の教員が中心となり、離乳食の進め方やスキンケア・ベビーマッサージの方法等を紹介しています。受講者の方よりわかりやすい、楽しく学ぶことができると大変好評いただいています。

オンラインで良いところは、受講者様が自宅でゆっくりお子様と講座を受けていただけること、周りを気にしなくて良いこと、会場に行かなくてもいいので遠くの方も受講できるところです。

## 【受講後のアンケートより】

- ・講義内容だけでなく、月齢の同じお母さんの悩みなども聞けて勉強になりました。
- ・初めての子育てなのでわからないことも多いので、知識として知らないことを勉強できて良かった。
- ・子育てについて、悩んでいることを相談出来た。
- ・とても参考になるアドバイスをいただけて、気持ちが楽になりました。
- ・楽しい雰囲気です、ずっと興味のあったベビーマッサージの講習を受けることができ嬉しかった

## 地域活動

## 三原テレビ放送 ～三原市チャンネル「県大でけんこう！」～

大学から三原市民に対して情報を発信し、地域に貢献することを目的として、三原市の広報番組「三原市チャンネル」の健康情報コーナー「県大でけんこう！」を三原テレビ放送(株)や三原市とともに制作しています。

今年度第2回目では、「家族のはじまり～気持ち良いお風呂を目指して～」と題し、本学助産学専攻科の教員と学生の出演・監修のもと制作されました。



助産師は、妊娠、出産、お産後だけでなく、ライフサイクル全般にある女性、乳幼児や家族を対象に支援をしています。すべての女性に寄り添い、女性の内なる力を信じ、人間性を重視した支援を行う専門職です。そんな助産師を目指す学生たちが、皆さんに知ってほしい、一緒に考えてほしい内容を紹介しています。今回のテーマは赤ちゃんのお風呂についてです。赤ちゃんは、大人と比べて皮膚が薄く肌のバリア機能が不十分で汚れや傷がつきやすく、デリケートなため、沐浴によって皮膚の清潔を保つことが重要です。また赤ちゃんの全身をチェックできたり、睡眠を促しやすくなり、同じ時間帯にお風呂に入れることで生活リズムをつくることもできるのです。



## 【沐浴の手順】

- 服を脱がせる
- 赤ちゃんをお湯につける
- 顔・頭・首・胸腹部・腕・手指・足・背中・臀部・陰部の順に洗う
- お湯からあげる
- 赤ちゃんを振らずにバスタオルでくるむ
- 押さえ拭きをする



本学公式 YouTube でもご覧いただけます。  
(<https://www.youtube.com/watch?v=iemiQlum4eA>)

## 準備するもの（沐浴中に使うもの）



## 研究紹介

## 話しづらさのある人の日常コミュニケーションの改善に向けて

保健福祉学部コミュニケーション障害学科 助教 中村 文

私たちは、話すことによって、メッセージを効率的に相手に伝えています。しかし、病気（脳卒中、神経難病など）や事故などによって、声帯、舌、口唇などの運動障害による話しづらさ（運動障害性構音障害）が生じてしまうことがあります。リハビリテーションにおいては、運動障害の改善（話しづらさの軽減）を図るとともに、話しづらさがありながらも、普段のコミュニケーションで伝えたいことを伝えられるようになることを目指します。

普段のコミュニケーションの改善は、病院のリハビリ室できれいな発音ができるようになることよりもずっと大変なことです。「伝えたい！」という気持ちが高まっているときに、発声や発音、周りの環境にまで気を配るのは容易なことではありません。話しづらさのある人だけでなく、日頃よく話す相手（会話相手）や言語聴覚士も一緒に取り組んでいきたい課題です。

## ～話しづらさのある人の思い～



現在、リハビリテーションに活用できる「日常コミュニケーション遂行度測定 (CPM)」を開発し、適用を試みています。CPMは、普段の会話の「伝わり具合」と「満足度」を、コミュニケーション障害の当事者である話しづらさのある人と会話相手がそれぞれ段階評価するものです。これまでの研究によって、次のことがわかりました。

- 1) 当事者評価 (CPM) と、言語聴覚士が行う発話検査 (会話明瞭度) の結果は必ずしも一致しない
- 2) CPMの活用が、本人、会話相手、言語聴覚士が共通の認識、目標を持つきっかけとなる

今後も、日常コミュニケーションに対する当事者の視点に着目した研究を進めることで、効果的なりハビリテーションの視点やツールの提供につなげたいと考えています。

## 言語・コミュニケーションの発達と支援に関する研究

保健福祉学部コミュニケーション障害学科 助教 小島 理恵子

私は、言語・コミュニケーションの発達に支援が必要な子どもに対して、安定した自己肯定感や自尊心感情を保つために求められる支援について研究を行っています。

これまでの取り組みとして、対人関係の苦しさや強いこだわりがあるといった特徴をもつ自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder : ASD) のある子どもの自己認知に関する研究を進めてきました。ASDの支援において、早期から適切な支援があれば、思春期における適応の度合いが高まると報告されています。そこで、ASDのある子どもの自己認知の発達過程を明らかにすることを目的に調査を実施し、幼児期のASDのある子どもが自身の学習や運動能力をどのように捉えているかを明らかにしました。また、幼児期のASDのある子どもの自己認知の発達には、相手の立場に立つことや相手の気持ちを察する力である、心の理論の発達が関係している可能性を示しました。

現在は、いわゆる不器用と呼ばれる協調 (運動) の発達に課題を持つ発達性協調運動障害 (Developmental Coordination Disorder : DCD) のある子どもの早い段階での気づきと支援開始につなげることを目的に研究を進めています。言語聴覚療法でよく用いられる発声発語器官の運動に関する検査を応用し、協調 (運動) の発達に関する評価との関連について検討しています。写真は、音響学分析に用いる音声・音響分析ソフトウェアです。DCDの発生頻度は5～6%と非常に高く、子どもの様々な発達に大きな影響を与えるため、二次障害の予防という側面からも支援の必要性が高まっています。

また、附属診療センターでの言語聴覚療法においては、子どもを中心として、地域の教育機関や医療機関、福祉施設の方々と協働し、より



良い支援について検討しています。こうした地域との連携を通して、子どもが自分らしく楽しく過ごせる環境作りに貢献していきたいと思えます。

## 学術講演会「里山の多様な連携が価値を生む」

11月10日に学術講演会「里山の多様な連携が価値を生む」を開催しました。今回は、山口県の周防大島でジャムの生産・販売を行う(株)瀬戸内ジャムズガーデンの代表取締役松嶋匡史氏を講師に招きました。松嶋氏は2018（平成30）年に地域自立活性化で総務大臣賞を受賞しています。

今年は例年とは異なり、新型コロナウイルス感染予防のため学外から参加者を制限し、Zoomでのリアルタイム配信を行いました。対面、リアルタイム配信で71名の参加があり、加えて学生がオンラインで適宜視聴できるようにしたため、さらなる参加者を加えて学術講演会を聞くことができました。

松嶋氏は、インターネット、交通、流通の発達に加え、顧客のニーズが多様化していることから、現在は地域の個性と多様性を価値に結びつける新たなブランディングが可能な時代だと述べ、周防大島で行われている地域の個性をブランドとした実践例を紹介しました。そして、今の農業・6次化（生産、加工、販売を一緒に行うこと）の戦略とは、地域がチームとなって戦うことだとしました。さらにオープンイノベーションとして、①異なる目線を入れる、②モノ・人・事の長所をみる、③チームを創る（巻き込み力）、④小さなチャレンジと情報発信を沢山が重要であると述べました。

続いて近年取り組んでいる島外から移住者を呼び込むプロジェクトについて、移住者と移住する人とを出会わせていること等の実践例が語られました。また、ご自身の家族が住職を務めるお寺も重要な地域活性化の資源であること、小学校、中学校、高等学校で起業を学ぶ取り組みを行っていることも紹介されました。2018（平成30）年10月22日に周防大島と本土を結ぶ大橋に貨物船がぶつかり、島の生活や産業が大きな危機を迎えるものの、その危機を如何に乗り越えたか、島の仲間とワンチームで行った話も印象的でした。「連携はひろく、個性は深く（地域内外の人材を連携させ、ここにしかない個性は磨く）」という考えは、改めてチームとして戦う重要性を印象づけるものでした。最後にレモンの木を植えることから始めたレモンチェッロづくりを紹介し、「100年続く地域産業を創る」重要性を説いて講演を終えました。

参加者からは新型コロナウイルス感染予防のため、多くの方が聴講できなかったことを惜しむ声が多くありました。



講演会の様子



オンラインでも配信しました

### 編集後記

地域連携センター第32号をお届けします。本号では、包括協定自治体との意見交換会とともに、本学の三学部がどのような地域連携活動や研究活動を行っているかを紹介しています。新型コロナウイルス感染拡大防止のために多くの制約を強いられる状況ですが、各キャンパスにおいては、積極的に公開講座、地域戦略協働プロジェクト、産学官連携等を進めています。

今後も地域の皆様のご期待に応えられるように様々な事業に取り組んでまいりますので、引き続きご支援とご協力をお願いいたします。

### 編集発行

県立広島大学地域基盤研究機構地域連携センター  
〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号  
電話(082)251-9534 / E-mail: renkei@pu-hiroshima.ac.jp  
<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/renkei/>

### 各キャンパス問合せ先

地域基盤研究機構庄原地域連携センター[本号編集担当]  
〒727-0023 広島県庄原市七塚町5562番地  
電話(0824)74-1704 / E-mail: gakuju@pu-hiroshima.ac.jp

地域基盤研究機構三原地域連携センター  
〒723-0053 広島県三原市学園町1番1号  
電話(0848)60-1200 / E-mail: mrenkei@pu-hiroshima.ac.jp